

インタビュアー：なぜいつもかならず人生にはうまくいかないことがあるのでしょうか？

J AM： 無意識、それは語ります。それは共通ではないことば（ラング）において、語ります。無意識は各自に個別的なことばにおいて語ります。精神分析のなかに、その鍵は存在しません。辞書はありません。夢についての辞書、言い間違い、失策行為についての辞書は、存在しません。辞書は存在するのですが、ラカンが言っていたように、各自がその頭のなかに、辞書をもっているのです。ひとはそれを買うことはできません。ではどうやってその辞書をめくることができるのでしょうか。ぱらぱらとめくる唯一の方法があります。ひとは話さなければなりません。あなたのところに浮かぶことを語らなければなりません。それがあなたに来るがままに、準備することなく、です。まったく自由に、です。ひとつの語からまたべつの語へと、です。純粋な頭で、です。それは難しいものです。そんなふうにはできません。本当にできません。しかしそれが、その方向性が肝心です。精神分析は話すことを知っています。そんなふうにです。わたしが言ったように、です。それを、技術的に言うなら、それが自由連想と呼ばれるものです。

ある詩人がもっとうまくそれを表現しました。アンドレ・ブルトンです。彼はフランスで、フロイトの出来事からショックを受けた最初の人たちのひとりです。シュールレアリズムは、その衝撃から起きたのです。ブルトンはこう言っていました。語は愛をなす（セックスする）、と。そうであるなら、精神分析では、語が愛をなすがままにしなければなりません。ですから精神分析はおそらくことば（パロール）の崇拜について、責任があるでしょう。それは今日、私たちのものです。いたるところで、ひとはもう本を読まなくなったり、若者はいつそう読まなくなってしまった、と嘆いているほどまでに、そうです。それは精神分析の効果なのはたしかです。ではことば（パロール）の崇拜とは、そのうえ、この番組がその証明です。ことばの崇拜は、転覆的な身振りのもと、68年5月に、現れたのです。

そして、拡散するこの崇拜は、それ以来、社会全体のものになりました。社会全体は、のちに真に命的的なものとなったものを、統治します。「言うことへの駆り立て」です。問題をまえにして、ひとは流暢に言い、しゃべらせます。それは訴えることであり、それは薬であり、普遍的なもの、万能薬です。ひとはあらゆる話題を召喚し、聞き、やり取りを交わし、対話します。そしてもしひとが望むような形でそれが起らなかったのならば、それはひとがそれを聞かなかつたから、やり取りを交わさなかつたから、対話しなかつたからです。このようにひとが望むような力が、あらゆる葛藤を緩和し、社会のなかの、家庭のなかの葛藤、各自がもに内密な葛藤を緩和します。ですからそれらについて話さなければなりません。

以上がひとが発見したものです。ことば（パロール）とは、最良の感覚麻痺である、と。眠りこけるためには、ことば以上のものはあるまい、と。そのうえそのことを、あなたはたった今、ラジオの前で、実感していることでしょう、笑。さらにこのことば（パロール）、感覚を麻痺させることばが、自由主義の真相であるという考え方もあります。

よろしい。精神分析においては、「言うことへの駆り立て」は、まったくべつのものです。それはまったく知覚麻痺を起こさせるものではありません。その反対であるとさえ言えます。ひとがだれかに打ち明けるということは、そのひとを安心させるものです。良く知られている効果です。そのためにフロイトを待ったわけでもありません。しかし分析においてひとが観察するのは、むしろ、最初に安心を得たあと、ひとは、より状態が悪くなりはじめることです。ですから、あきらかにここで、ひとはストップ！と言ふこともできます。そしてひとはどうするのか分かっています。ちょ

っと利口な人たちがいて、その人たちにはセラピーを提案します。序盤に近いところで終わることは、まさに予想されることです。ひとが 12 回のセッションとか、20 回のセッションとか、あるいは 3 か月のあいだセッションをした後で、さようならだれだれさん、あなたは治りましたよ、と言うのです。

それは愚かなことではまったくありませんと、私はあなたに言うつもりです。それは絞め棒をするかのように、下がっていく傾斜を止めてくれるもので。そのときあなたは絞め棒とともに、あなたの栓とともに、散歩するというわけです。

ラカンは、「ひとが分析で得ることができるすべて治療的な効果を、ひとは最初の 3 か月で得ることができる」、と遠慮せずに言っていたものです。これはひとつのパラドックスです。というのはもしそれが本当なら、それにもかかわらずなぜ何年もひとは分析にとどまるのでしょうか。もし本当に望むならひとはとどまります。こう言ってよければ、妨げられていることに満足しないなら、ひとは分析にとどまります。ものごとに捉われたままなら、ひとは分析にとどまります。もし、ひとが泣くのをやめない、ひとが嘆くのをやめない、絶望することをやめないといった理由で、すべてが止んだわけではないとひとが気付くなら、分析にとどまります。

ひとは今日のセラピーを提案します。そしてあなたを仕事に送り出すのです。そもそもっと多くの場合、それが「治癒する」と、ひとが呼ぶものです。治癒すると呼ばれるもの、それは、ひとが働きはじめることが可能になることです。よいのではないでしょうか？それはまったく馬鹿なことではありません。仕事とは健康です。そうですね。とりわけ雇う側のひとからすると、そうである、と、言っておかなければなりません。あなたの仕事とは、その人たちの健康です。あるいは、いわば、それは会社における健康です。今日そう説明されているように、です。

ですからひとはあなたに、その人たちのよろい戸であるプシ [精神分析家や精神科医、臨床心理士らの総称。頭文字に psy がつく職業の人たち] を備えた、安心を提案します。すべてのひとが、プシを望んでいます。幸福というものがそれ以降、プシの案件になります。ですからプシからひとはそれを望みます。とりわけ、非常に値の張るプシからは。いつそれが始まり、いつそれが終わるのかを知っています。英語では、managed care マネージドケア、と言います。組織化されたケアのことです。ケアされたケア、丁重にケアされたケア、です。効果は保証されています。[略] それは労働市場のために開かれています。有益のことです。社会的に役に立ちます。社会的有用性、その上に立つべきものは何もありません。

それは発明されるものです。プシの形に作り変えられたものです。それは、具合の悪いところを示すために、標準化された質問に○×をつけることから始まるでしょう。あなたは朝悲しい気持ちがしますか？少し、たくさん、情熱的に、狂うほどに、まったくない、のうちのどれですか？と。ひとはすべてをあなたに合うようアレンジするでしょう。あなたはある考えを抱きます。それはたいして重大なことではありませんか？たいして暗い考えではありませんか？と。あなたはくもが怖いですか？ほらここに一匹います。くもはあなたを食べませんし、あなたをかじりません。くもは優しいし、あなたは慣れるでしょう。あなたは通りに出るのが怖いですか？あなたは間違った考えに苦しんでいますか？わたしにあなたのお供をさせてください。これは通りにでるというエクササイズです。あなたは出来ますよ。分かります・・。

それを発明した人たち、そしてマネージケアの王となった人たちは、患者にうんざりしていた精神分析家たちでした。かならずしも興味深いというわけではない、繰り返される話、想像力に欠けた話を聞くのに、その種の番組よりもあまりに多くの時間を一まあ 40 分とか、45 分、50 分とかでしよう—割いていると考えた分析家たちです。もう無理だったのです。彼らはセッションを終わりにしなければならなかったのでしょう。それをまた開けるために、なぜならあなたの父親が・・、あなたの母親が・・、とか。よろしい。そういったことに彼らはうんざりだったのでしょう。わかります。アメリカでの精神分析の実践のやり方を見るなら、またフランスでさえ、そこやここで、うんざりしていたことに驚くわけではないとさえ言えます。ある視点からすればそれが唯一の反応だったりします。そのうえそれは、ひとりのフランス人がそれを発明したのです。その映画のように、です。 [略] しかしアメリカこそが、それをアメリカで産業の分野ではやらせました。

そのフランス人の天才とは、クーエ氏(Émile Coué)です。エミール・クエです。クエ氏は薬屋でした。彼は 1926 年に死去しました。彼の方法は、毎日、朝起きる時に、「自分はだんだん状態が良くなっている」みたいなことを唱えることにありました。しまいに、ひとはそれを信じるようになるものです。そうやって暗い考えを追い払うのが至高のものとされたようです。 [略] それは、自己催眠と呼ばれるものです。

今現在は、自己催眠の教授たちが存在していて、彼らの 12 回、3 か月間のセッションでは自己催眠が教えられています。本當です。もちろん、自己催眠の教授たちは、自分たちに本当にたいへん満足しています。普通のことですね。なぜなら彼らは自己催眠の名手だからです。より困ることは、質問に結びつけながら統計の専門家たちを暗示にかけることです。×印のつけられたものすべてのおかげで、センセーショナルな計算ができるようになり、資料で溢れている管理（行政機関）はふたたび質問等を要求し、統計学者たちに委ねます。それらすべてが巨大な産業を誕生させるということです。集団的な、と言われる、査定報告書があり、それは・・言ってみれば、そこにあったのは、次元でいえば・・、集団的妄想です。それが彼らのうちではまかり通るでしょう。アメリカで人々が通している最中であるのと同じように、です。

それは安売りされたプシです。 [略] 精神分析もそれに似ているでしょうが、違います。まったく違うものです。というのは自己暗示とか、暗示と言うのは、なにがうまく行っていないのかをひとは知っている、だからそれを欄に×印をつけることで、言うことができるという考えに基づいています。あるいは類型的な質間に答えることで、なにがうまく行っていないのか言える、という考えに基づきます。 [略]

今日、こんなふうに機能している同じようなことは、たくさんあります。機械が止まると、ひとはなかを調べて、うまく作動していないところを発見し、診断して、部品をいれて、ふたたび動かすのです。あるいはまた、企業の問題であれば、生産性が落ちて、診断し、適用して、出直します。誰かの類型が、そっちのモデルのそれではない、というのには根拠がありません。それが想定しているのはもちろん、人間は一種の機械であり、自身が一種の機械であると表現することがふさわしいということです。なぜならそれらの機械にひとは環境づけられていて、企業自体が機械のように機能しているからです。

ですから、メンタルとひとが呼ぶものは、機械の部品のひとつであると、ひとは想像します。そしてメンタルは機械のように正しく作動するものであると想像されています。正しい考え方をもち、世

界に適応した形で、世界の秩序に適合的に、作動するものなのだ、と。そしてもしそうなっていない場合は、間違った接続が確立されてしまっているのだ、ソフトウェアにバグが存在すると想像するのです。あなたはあなたのソフトウェアにバグを持っているということになります。

しかし、人間においては、メンタルは本来、適応的で、現実主義で合理的である、その証拠にメンタルはちゃんと機能しているという考えは、まったく確かではありません。それはむしろ逆です。そっちのほうが確かに確実なことです。人間についての考えがどう作られたのかを見てみましょう。たとえば神は自らの像から人間をつくったとか。どこでひとは神を探しに行つたのでしょうか。どこからひとは神を知り、ひとつの神が存在するということを知るのでしょうか。ああ、なるほど、ひとは答えを見つけました。ああ、神を信じることは、健康にいいらしいですね。それは証明されましたね、とか。しかしそれはたぶん少し短絡的な説明でしょう。まあ、神のことは脇において、欲望のことを見てみましょう。つねに欲望にかんする問題があるし、欲望はつねに問題を引き起こすものです。そして享楽。これはつねに過剰であるか、十分にはないか、です。つねになにかうまくいかないものがあり、決してふさわしい場所になく、あるべきところにもありません。もちろんそれはなんとかなります、ひとができる形で、なんとかなるでしょう。

しかもしひとがもう少しそれについてもっと知ろうとしたり、その居心地の悪さがたんに解決を待つ問題なのではなく、包帯を待つような軽い痛みでもないと感じる場合。そこにはなにか、謎めいた次元のものがあります。そこで、ひとは分析当初に得られた、最良のものに、満足しません。ひとはそれを越えて、進むのです。ひとは困難にぶちあたります。ひとはよりあまり善とは言えなくなつたものに對峙します。

いったい何が起こっているのでしょうか？分析に入ると、最初の3か月のあと、ひとはより多くの症状をもつようになります。ひとはより多くの症状をもつようになるのは、まず、ひとがそれに気がつかないからです。ひとが気がついているのは、以前自分がどうであったのか、そうですね、自分の存在のあり方、存在のいろいろなあり方が、良かったということです。ひとはそれらが症状であると気がつくのです。そしてその症状が、じっさい、毒におかされ始めていることに気がつくのです。そしてそれはかたちをとり、それは様式化され、場合によっては、ひとは、より、病人になるのです。そして、病人が噛まれるということも起こります。分析において、ひとがそれを好きになるとよいのですが。